

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23593297

研究課題名(和文) 思春期女子の受診行動影響要因である親への介入研究 - HPVワクチン普及の試み -

研究課題名(英文) Intervention study to the parent who is the consultation action influence factor of the adolescent girls - Does the HPV vaccine spread advance by approaching a parent?

研究代表者

石走 知子 (ISHIBASHIRI, TOMOKO)

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授

研究者番号：00335051

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は若年女性に発症の多い子宮頸がんの予防のためのHPV(Human papillomavirus)ワクチン接種や子宮がん検診への理解をめざし、思春期学生を受診行動影響要因である「親」に着目し介入調査を行った。その結果、HPVワクチンや子宮がん検診の情報提供が十分でない現状があり、情報提供の介入を行ったところ、知識向上、子どもへのアプローチは増加したが、情報満足度、HPVワクチン接種率向上は認めなかった。HPVワクチン接種の副反応に関する保護者の抵抗感は強く、現状ではHPVワクチンに対する偏りのない情報を提供し続けること、また子宮がん検診の推奨は一層高めていく必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study aimed at the understanding of HPV (Human papillomavirus) vaccination and uterine cancer examination for the prevention of the uterine cervix cancer that much onset in young women, and conducted intervention investigation focusing on "the parent" who was a consultation action influence factor of the adolescent girls.

As a result, there were the present conditions that the information provision of HPV vaccine and the uterine cancer examination was not enough; after the intervention of information provision, the knowledge improvement and the approach to girls increased, but the information satisfaction and the HPV vaccination rate improvement was not recognized.

As a feeling of resistance of the protector about the vice-reaction of the HPV vaccination was strong, under the present circumstances, continuing provide the information of HPV vaccine with no bias and also need more recommendation of the uterine cancer examination have been suggested.

研究分野：発達看護学

キーワード：思春期女子 親 HPVワクチン 子宮がん検診 受診行動 介入調査

1. 研究開始当初の背景

女性の癌において、子宮頸がんは、世界中で第2番目に多く発生している悪性腫瘍であり、日本では、20-30代の若年女性に発症する悪性腫瘍のうち第1位を占め、乳がんに比して20代で5倍以上、30代で1.5倍以上の発症率を持つ。初交年齢の若年化に伴い、HPVの感染機会が若年化し、子宮頸がんの発症年齢が早まっていると言われている。子宮頸がんの原因のほぼ全てはHPVの持続感染であることが明白になってから、予防効果を持つHPVワクチンの開発が進み、ワクチン接種率・がん検診受診率向上は世界のコンセンサスとなり、子宮頸がん根絶に向け全世界が取り組んでいる状況である。女性産婦人科医師による子宮頸がん予防啓発団体や、「日本思春期学会」など、日本の関連団体も、子宮頸癌撲滅に向け様々な活動に取り組み始めている。しかし、日本における現状は、昨年(2009年10月)にHPVワクチンの認可がなされ、医療保険での償還をもって費用対効果ありと示されているにもかかわらず、任意接種ワクチンであるため定期ワクチンに比較して接種率が低く、国の資金援助や運営面から普及には大きな問題を抱えている。また、日本における子宮頸がん検診の受診率は30%以下といわれ、欧米の検診先進国の受診率80%以上に比較し、著しく劣っている現状がある。検診先進国の海外調査(米国疾病管理予防センター: CDC)でも、低年齢層(13歳以下)の娘へのワクチン接種を希望する母親は半数に過ぎないと言われ、ワクチン普及には様々なアプローチが必要とされている。

われわれは、これまでに思春期学生のセクシュアル・ヘルスの問題に関わる受診行動について看護学・認知行動心理学的視点から研究を重ねてきた(科学研究補助金: H16-18・若手研究B・16791395, H20-22・基盤研究C・20592587)。その中で、思春期学生の性に関わる問題での受診行動には、一般的な身体問題での受診と異なった特徴ある認知行動傾向を持っており、影響要因の一つとして『親』の存在があることを確認した。先行研究においても、親の加入する保険の種類、問題が起こった際の親の判断、親の付き添い・介在の希望、親への相談・コミュニケーション等が受診行動に及ぼす影響力は大きいものであった。

2. 研究の目的

思春期学生の受診行動に関する知見から、若者の受診行動に影響のある『親』を対象にHPVワクチン普及のための啓発教育プログラムを提供した場合、その親からコミュニケーションされた思春期女子はHPVワクチン接種率や子宮頸がん受診率の向上が図られるのではないかと考えたことが、本研究の着想に至った経緯である。本研究は、我が

国で20-30代の若年女性に発症する悪性腫瘍のうち第1位を占める子宮頸がんの予防のためのHPV(Human papillomavirus: 以下 HPV)ワクチン接種率や受診率向上をめざし、思春期学生のセクシュアル・ヘルスに関わる問題(月経、性感染症、妊娠など)での受診行動影響要因の一つである『親』への啓発教育プログラムの開発とその有用性の検討を行う。そして、『親』からのコミュニケーションを通じて思春期女子へのHPVワクチン接種に対する理解と子宮頸がん検診の普及を図ることにより、思春期から始まる生涯を通じた女性の健康・ウィメンズヘルスの向上に貢献することを目的とした。

なお、研究期間中、HPVワクチン接種に関する状況はめまぐるしく変遷した。研究着手当初は、2010年11月26日から子宮頸がん等ワクチン接種緊急促進事業が始まり、HPVワクチン接種が推進される状況になったが、自治体によっても費用負担が異なり、任意接種で高額な実費負担があることなど多くの課題があった。2013年4月1日からは定期接種となり、HPVワクチン接種の環境は整えられつつあったが、副反応の報告が報道を通じ多く挙がってきたことから、2013年6月14日に厚生労働省が積極的勧奨の一時中止を勧告することとなった。このような状況の変化に対応するために、国民感情や我が国の施策を尊重しつつ、当初の研究目的や研究方法に関して再検討を繰り返し重ね、以下の7つの研究目的を挙げ、慎重な研究遂行に取り組んだ。

(1)【研究1】「子宮頸がん予防接種啓発プログラム実施報告」

世界で子宮頸がん予防のHPVワクチン接種が活発に行われ日本でも導入されるに至ったが、任意接種であり十分な周知がされていない状況が考えられ、予防医学の観点から、接種可能年齢の小・中学生の保護者に普及プログラム講義を行い、その効果を検討することを目的とする。

(2)【研究2】「HPVワクチン接種意欲に影響を及ぼす要因」

HPVワクチン接種を受ける当事者(女子高校生)の接種に対する考え方と接種意欲との関連を明らかにすることを目的とする。

(3)【研究3】「大学生女子の子宮がん検診・子宮頸がん予防ワクチン接種についての情報提供に関する調査」

大学生女子の子宮がん検診・子宮頸がん予防のワクチン接種についての知識状況および情報提供状況に関する調査を行うことにより、より効果的な情報提供の方法や、学校教育における生活習慣病としてのがん予防教育に必要なとされる健康教育の内容や情報提供の方法について示唆を得ることを目的とする。

- (4)【研究4】「大学生男子の子宮がん検診・子宮頸がん予防ワクチン接種についてのパートナーへの推奨に関する調査」

大学生男子の性感染症の知識状況および子宮がん検診・子宮頸がん予防のワクチン接種についてのパートナーへの推奨に関する調査を行うことにより、学校教育における生活習慣病としてのがん予防教育に必要とされる健康教育の内容や情報提供の方法について示唆を得ることを目的とする。

- (5)【研究5】「保護者の子宮がん検診・子宮頸がん予防ワクチン接種に関する情報提供に関する調査」

保護者の子宮がん検診・子宮頸がん予防のワクチン接種に関する知識状況、および情報提供状況に関する調査を行うことにより、保護者が必要とする情報提供の内容や方法について示唆を得ることを研究目的とする。

- (6)【研究6】「Survey on provision of information to guardians about uterine cancer screening and cervical cancer prevention vaccination」

The purpose of this study was to understand guardians' level of knowledge about uterine cancer screening and cervical cancer prevention vaccination.

- (7)【研究7】「子宮がん検診・HPV ワクチン接種に関する保護者から子どもへの情報提供に関する介入研究」

子宮がん検診受診および HPV (Human papillomavirus: 以下 HPV) ワクチンへの理解をめざし、思春期学生のセクシュアル・ヘルスに関わる問題(月経、性感染症、妊娠など)での受診行動影響要因の一つである『親』から子どもへ有効な情報が伝達されるための効果的なアプローチを検討することを目的とする。

3. 研究の方法

- (1)【研究1】

1)対象:A県2校区の女子小学生・中学生の保護者66名

2)方法:子宮頸がん予防の HPV ワクチン普及プログラム講義(以下講義)を保護者集団に提供し、前後に質問紙調査を実施。

- (2)【研究2】

1)対象:B県女子高校生151名

2)方法:無記名自記式質問紙調査

- (3)【研究3】

1)対象:C県大学・短期大学1年生女子411名

2)方法:無記名自記式質問紙調査

- (4)【研究4】

1)対象:大学・短期大学1年生男子177名

2)方法:無記名自記式質問紙調査

- (5)【研究5】

1)対象:C・D・E県の中学1年~高校3年までの女子を子どもに持つ保護者576組

2)方法:無記名自記式質問紙調査

- (6)【研究6】

1)Object: The participants were 574 parents from two prefectures who had daughters studying in the first grade of junior high to the third grade of senior high school.

2)Method: They were asked to anonymously complete a self-administered questionnaire distributed via mail.

- (7)【研究7】

1)対象:F県私立女子中学校・高等学校の保護者504名(介入群:32名,非介入群472名)

2)方法:講演60分の介入を加えた無記名自記式アンケート調査を行った。調査は介入群が事前・直後・2ヵ月後の3回で、非介入群は事前・2ヵ月後の2回実施した。調査内容は、子宮がん検診に関する項目、HPV ワクチン接種に関する項目である。

なお、分析については、統計ソフト SPSS を用い、²検定、t検定、一元配置分散分析、二元配置分散分析を行った(P<0.05)。

4. 研究成果

- (1)【研究1】

1)結果:講義前の子宮頸がん予防ワクチンの認知度は77%。講義実施後に「子どもにワクチンを接種しない、分からない」と答えた者は65%で、その理由としては「任意接種である」「高額な費用」「副作用の出現」「持続効果への不安」があげられた。

2)考察:認知度が高かった理由としてはTVで予防ワクチンのCMが放送された時期と調査時期が同時期であったことが考えられた。講義実施後に前向きな変化が見られなかった要因としては、公費助成がなされていない状況で提供された知識に対し不安が増大したことが考えられた。

- (2)【研究2】

1)結果:接種意欲に関する要因は「ワクチンの知識」「効果」「副反応」「その他」の4カテゴリーに分類され、具体的な知識がある者、ワクチンの効果を高く評価している者ほど、副反応に対する恐怖心があっても接種意欲が高かった。

2)考察:副反応に対する恐怖心を上回る期待があれば接種意欲は維持されることから、接種行動を促すにはワクチンのメリットだけでなくデメリットも正確な情報として躊躇せずに伝える必要が示唆された。

(3) 【研究3】

- 1) 結果：対象者は、検診受診率 8.8%、ワクチン接種率 72.7%であった。検診の知識は『検診経験あり』の者は『検診経験なし』の者より知識が高い傾向にあったが「費用の補助」と「対象年齢」のみ差が見られた。検診の情報源は「母」「所属学校」「新聞・TV」「公的機関」「医療機関」が多く選択され「検診経験なし」の者では「新聞・TV」を多く選択していた。検診の情報満足度は「保護者からの情報」および「保護者以外からの情報」ともに7-8割不足しているとしていた。接種の知識では「知って説明できる」者は1-3割以下であり「知らない」者は3-7割の認知状況であった。『接種あり』の者は『接種なし』の者より知識が高い傾向にあったが「公費助成」「接種回数」のみ差が見られた。接種のきっかけは「母」「所属学校」「公的機関」「新聞・TV」「医療機関」が多く『経験あり』の者は「母」「所属学校」を多く選択し『接種なし』の者は「医療機関」「新聞・TV」「友人・知人」「ネット」が多く選択されていた。接種の情報満足度は「保護者からの情報」および「保護者以外からの情報」共に5-8割が不足しているとし、特に「接種なし」の者が不足している割合が高かった。接種のメリット・デメリットの認知は『接種あり』の者はメリットを高くデメリットを低く認知し、『接種なし』の者はメリットを低くデメリットを高く認知していた。
- 2) 考察：子宮がん検診・子宮頸がん予防のワクチン接種共に、接種当事者である思春期女子に十分な情報提供がなされていない可能性がある。

(4) 【研究4】

- 1) 結果：18-19歳で9割を占め、女性パートナーの存在する者は18.3%であった。STIの知識は「子宮頸がん」「クラミジア」「淋菌感染症」「尖圭コンジローマ」の4項目では1割以下の認知であり「エイズ」のみ5割以上の認知であった。女性パートナーへの検診の推奨について「すすめたい」者の方が「どちらでもない」者より知識が高い傾向があった。接種の知識は「知って説明できる」者は1割以下であり「知って説明できない」者を合わせて2-3割のみが認知していた。女性パートナーへの接種の推奨について「すすめたい」「すすめたくない」とする者の方が「どちらでもない」者より知識が高い傾向にあった。接種の現状情報の認知について接種を「すすめたくない」者は、厚労省の接種推奨差し控えを知っている者が有意に多かった。接種のメリット・デメリットの認知について「すすめたい」者はメリットを高くデメリットを低く認知し、「どちらでもな

い」「すすめたくない」者はメリットを低くデメリットを高く認知していた。パートナーの存在と検診の推奨および接種の推奨について、パートナーの存在の有無でほとんど差はなかった。

- 2) 考察：男子大学生に無関心群の存在が示唆された。パートナーシップの効果の可能性も鑑み、男子大学生の知識や意識を高める必要がある。
- ### (5) 【研究5】

- 1) 結果：対象者は、平均年齢44歳、母親が9割、父親が1割弱であった。検診の知識は「知って説明できる」者は3-8割であり、「定期受診群」は知識が高い傾向にあり5項目中2項目には差がなかった。検診の情報源では「公的機関」「医療機関」「新聞・TV」「知人・友人」が多かった。検診の情報満足度では『定期受診群』では3割半、『不定期受診群』では6割半の者が不足としていた。子どもの接種状況は、中学2年生以下の接種率は8-13%以下、中学3年生以上は約50%以上が接種している状況であった。接種の判断に際しての気持ちは、どの学年も実際の接種率より「接種させたかった」「どちらかといえば接種させたかった」とする保護者が多く、接種率8-13%以下である中学2年生の以下を持つ保護者も42-45%存在した。接種の知識は「知って説明できる」者は5-8割であり『接種させた』・『接種後に中断した』者は知識が高い傾向にあった。接種の情報源は「公的機関」「医療機関」「新聞・TV」「友人・知人」「子どもの学校」が多く、『接種させた』・『接種後に中断した』者では「子どもの学校」、『接種させなかった』者では「新聞・TV」を多く選択していた。接種の情報満足度は7-9割が不足としていた。接種のメリット・デメリットの認知は、『接種させた』者はメリットがデメリットより高く認知され、『接種後に中断させた』・『接種させなかった』者はデメリットがメリットより高く認知されていた。今後情報を得るための有効な手段としては「保護者・子ども同伴の講演会」「学校主催の催し」などが上げられた。

- 2) 考察：保護者への情報提供の不足が伺えた。

(6) 【研究6】

- 1) Results : Knowledge about screening was 30-75% "explanation can be". Information sources of medical examination were "public institutions," "medical institutions," "newspapers and television," and "friends". With regard to the vaccination status, vaccination rate of vaccination subject since 2013 was 12% or less and 2013 previous

vaccination subjects was over 50% had been inoculated. Knowledge of inoculation was 50-80% as "know and explanation can be". With regard to the source of inoculation information, they "were inoculated," and they "were interrupted after inoculation," were "child's school," while those who chose not to be inoculated listed "newspaper and television" as their main source of information. Between 70 and 90% were unsatisfied with the information they possessed about inoculation.

2) Discussion : From the results of this survey, we consider that there is insufficient provision of information about cervical cancer screening to the guardians.

(7) 【研究 7】

1) 結果: 検診知識得点とワクチン知識得点については、介入群が非介入群より得点が向上し、2 ヶ月後も高い得点を保っていた。HPV ワクチンを取り巻く状況把握については、「WHO の安全声明」「女性のがん関連学会のワクチン推奨再開請求」の認知率が向上し、介入群が非介入群より 2 ヶ月後も高い認知率を保っていた。子どもとの会話においては「子宮がん検診」「HPV ワクチン接種」とともに、介入群が非介入群より「よく話した・まあまあ話した」割合が高かった。しかし、HPV ワクチンのメリット・デメリット、接種に際しての気持ち、情報の満足度、介入後の接種率については、介入群と非介入群との間で有意な介入の効果は見られなかった。接種に際しての気持ちの自由記述分析では、「副作用に対する意見」が介入群・非介入群ともに最も多く、介入群では非介入群に比較して「子宮がん検診に対する意見」が多かった。

2) 考察: 介入の効果として、知識の向上や子どもへのアプローチの増加は認められたが、情報の満足度に変化はなく HPV ワクチン接種率の向上も認められなかった。HPV ワクチン接種の副作用についての保護者の抵抗感は強く、現状では偏りのない情報を提供し続けること、また子宮がん検診の推奨は一層高めていく必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

(1) 石走知子, 田中祐子, 若松美貴代, 有倉巳幸, 竹林桂子, 葉久真理, 松浦賢長: 子宮がん検診・HPV ワクチン接種につ

いての保護者から子どもへの情報提供に関する介入研究, 思春期学, 34, 122-123, 2016, 査読無

(2) 石走知子, 若松美貴代, 有倉巳幸, 田中祐子, 松浦賢長, 竹林桂子: 大学生女子の子宮がん検診・子宮頸がん予防のワクチン接種についての情報提供に関する調査, 思春期学, 33(1), 123, 2015, 査読無

(3) 石走知子, 若松美貴代, 有倉巳幸, 田中祐子, 松浦賢長, 竹林桂子: 保護者の子宮がん検診・子宮頸がん予防のワクチン接種についての情報提供に関する調査, 思春期学, 33(1), 123-124, 2015, 査読無

(4) 石走知子, 若松美貴代, 有倉巳幸, 田中祐子, 松浦賢長, 竹林桂子: 大学生男子の子宮がん検診・子宮頸がん予防のワクチン接種についてのパートナーへの推奨に関する調査, 思春期学, 33(1), 124, 2015, 査読無

(5) 吉田佑子, 小松えり, 谷川瑞穂, 藪田奈穂, 山崎茉由, 川崎純子, 渡邊玲子, 松浦賢長: HPV ワクチン接種意欲に影響を及ぼす要因, 母性衛生, 54(3), 356, 2013, 査読無

(6) 石走知子, 若松美貴代, 三浦陽子, 井上尚美, 下敷領須美子, 藤野敏則, 吉留厚子, 竹林桂子, 有倉巳幸: 高校生の性感感染症問題における対処意識の向上を図るための介入研究, 思春期学, 30(1), 60-61, 2012, 査読無

(7) 鶴田伸子, 林昭子, 松浦賢長: 子宮頸がん予防接種の普及啓発プログラム実施報告, 思春期学, 30(1), 71-72, 2012, 査読無

〔学会発表〕(計 8 件)

(1) 石走知子, 田中祐子, 若松美貴代, 有倉巳幸, 竹林桂子, 葉久真理, 松浦賢長: 子宮がん検診・HPV ワクチン接種についての保護者から子どもへの情報提供に関する介入研究, 第 34 回日本思春期学会総会・学術集会, ピアザ淡海(滋賀県・大津市), 2015.8.29~2015.8.30

(2) Tomoko Ishibashiri, Yuko Tanaka, Mikiyo Wakamatsu, Miyuki Yukura, Keiko Takebayashi, Mari Haku, Toshiyuki Yasui, Kencho Mtsuura: Survey on provision of information to guardians about uterine cancer screening and cervical cancer

prevention vaccination, THE ICM Asia Pacific Conference, PACIFICO YOKOHAMA (KANAGAWA ・ YOKOHAMA), 2015.7.20 ~ 2015.7.22

(3)石走知子,若松美貴代,有倉巳幸,田中祐子,松浦賢長,竹林桂子:保護者の子宮がん検診・子宮頸がん予防ワクチン接種についての情報提供に関する調査,第33回日本思春期学会総会学術集会,つくば国際会議場(茨城県・つくば市),2014.8.30~2014.8.31

(4)石走知子,若松美貴代,有倉巳幸,田中祐子,松浦賢長,竹林桂子:大学生女子の子宮がん検診・子宮頸がん予防ワクチン接種についての情報提供に関する調査,第33回日本思春期学会総会学術集会,つくば国際会議場(茨城県・つくば市),2014.8.30~2014.8.31

(5)石走知子,若松美貴代,有倉巳幸,田中祐子,松浦賢長,竹林桂子:大学生男子の子宮がん検診・子宮頸がん予防のワクチン接種についてのパートナーへの推奨に関する調査,第33回日本思春期学会総会学術集会,つくば国際会議場(茨城県・つくば市),2014.8.30~2014.8.31

(6)吉田佑子,小松えり,谷川瑞穂,藪田奈穂,山崎茉由,川崎純子,渡邊玲子,松浦賢長:HPVワクチン接種意欲に影響を及ぼす要因,第54回日本母性衛生学会,大宮ソニックシティ(埼玉県・さいたま市),2013.10.4~2013.10.5

(7)石走知子,若松美貴代,三浦陽子,井上尚美,下敷領須美子,藤野敏則,吉留厚子,竹林桂子,有倉巳幸:高校生の性感染症問題における対処意識の向上を図るための介入研究,第30回日本思春期学会総会・学術集会,国際医療福祉大学福岡天神キャンパス(福岡県・福岡市),2011.8.27~2011.8.28

(8)鶴田伸子,林昭子,松浦賢長:子宮がん予防接種の普及啓発プログラム実施報告,第30回日本思春期学会総会・学術集会,国際医療福祉大学福岡天神キャンパス(福岡県・福岡市),2011.8.27~2011.8.28

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:

種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

石走 知子(ISHIBASHIRI TOMOKO)
鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授
研究者番号:00335051

(2)研究分担者

竹林 桂子(TAKEBAYASHI KEIKO)
徳島大学・大学院医歯薬学研究部・講師
研究者番号:20263874

若松 美貴代(WAKAMATSU MIKIYO)
鹿児島大学・医歯学域医学系・助教
研究者番号:50433074

有倉 巳幸(YUKURA MIYUKI)
鹿児島大学・法文教育学域教育学系・教授
研究者番号:90281550

葉久 真理(HAKU MARI)
徳島大学・大学院医歯薬学研究部・教授
研究者番号:50236444

安井 敏之(YASUI TOSHIYUKI)
徳島大学・大学院医歯薬学研究部・教授
研究者番号:40230205

松浦 賢長(MATSUURA KENCHO)
福岡県立大学・看護学部・教授
研究者番号:10252537

(3)連携研究者